

塾経営者の立石氏が、会いたい先生に会いに行き、率直な言葉を投げかけ対話する「体当たりインタビュー」。今回ご紹介するのは、近年、志望者数の増加で注目を集めている大宮開成中学・高等学校の越阪部先生です。子どもたちへの思い、教員全員参加の大学入試の検討会、そういった情熱を伺った後、締めの部分で「目立たない先生になりたいです」とおっしゃる越阪部先生。「その真意は？」。心配するまでもなく、越阪部先生の信念が貫かれたものでした。入試分析と生徒たちへの思いの両方が浮かび上がる取材となりました。

第二十六回

大宮開成中学・高等学校教諭
越阪部 晋 先生

越阪部 晋 先生 プロフィール

国語科、担当。早稲田大学教育学部国語国文学科卒。大宮開成高等学校に入職。同校中学校設立準備委員会に参加。その後大宮開成中学・高等学校、一貫部第1期生の担任、一貫部ステージ主任を経て、現在、一貫部主任・教務部長。



探究活動での個々の発想やアプローチは、将来きっと「世の中の人」に役立ちます

「自分の子どものように」生徒に接することで、想像もつかない成長が実感できる

立石 私事で恐縮ですが、2012年に北赤羽で塾を開業しました。開校当初から、塾生を御校に受験をさせているのですが、4～5年前から出願者が急激に増え、入試の難易度が高くなり、中々、合格できない状況が続いています。何か要因があったのでしょうか。

越阪部 2点あります。1点目は保護者がお子さんの志望する中学校をよく研究されていて判断基準を持たれていたことです。2点目は、東京都に住んでいる受験生が1月10日に本校よりも上位の学校に合格すれば、2月1日の東京入試を迎えることができますが、不合格だった場合、12日、14日に入試を実施している本校を受験することも否めません。本校を合格できれば、2月1日の受験校も変更できるというメリットもあります。保護者の方が、本校の入試が盛り上がっていると認識して、受験をしていただくという流れができたからこそ、受験者が増加して、難易度が高くなる傾向になったと考えています。

立石 御校の合格者で、そのまま入学する割合も高くなったのではないですか。

越阪部 以前と変わらず、9%～10%ですね。埼玉県の学校はどこもこの割合で推移しているかと思います。東京から受験する生徒は、東京都内の学校に合格すると、そちらの学校に進学します。距離的な問題ももちろんあります。また、県

内の受験生でも、県外の学校に進学するケースもあります。こちらは進学した生徒の満足度を上げて、いかに伸ばしていくかに尽きます。昼間は「自分の子どものように」生徒に接して、生徒は夜に本当の家庭に帰っていくような感覚です。中学校から入学した生徒は伸びしろが大きく、想像もつかないような成長を見せてくれる生徒もいます。

立石 確かにそうですね。6年間という長期ビジョンで育てるからこそ、6年後の成長が目に見えて実感できますよね。最近、メディアで取り上げられていますが、御校は、難関大学の進学者数が伸びているという記事をよく拝見していますが、要因としては、中学受験の生徒が牽引されているのですか。

越阪部 伸び率で言えば中学受験から入学した生徒がよく伸びているのも事実ですが、高校から入学してくる生徒もレベルが高いので、お互い伸びています。

立石 相乗効果ですね。中学校と高校で校門と校舎が分れていて驚いたのですが、中高一貫部生と高校入学者の高校のカリキュラムは、別ですか。

越阪部 授業の進度が違うので、基本的に別です。一貫部の高校生は高校部の校舎を使用していますが、高校から入学してくる生徒とは部活動と、文化祭のみ混合となります。

立石 高校から入学する生徒と中学から入学する生徒のタイプは違いますか。

越阪部 中学から受験して入学する生徒は純粋な生徒が多いです。高校から入学してくる生徒は中学校から入学する生徒と比較すると大人ですね。その分、イベントなどで積極的に参加するのは中学校から入学した生徒です。恐らく、中学受験をした生徒は、中学に入学する際に、学校生活は自分たちで運営するという自治の精神を持っている生徒が多いのです。自分で企画して、実行しています。高校から入学する生徒は、3年後に大学受験があるので、勉強に集中している生徒が多い気がします。

しっかり意見を書いてほしいという問題の意図。入学生のポテンシャルが向上

立石 通学されている生徒は、埼玉県外から通学する生徒も多いのではないですか。

越阪部 今年の中学1年生は埼玉県から通学する生徒と東京都から通学する生徒の割合は2対1ですね。

立石 東京からの通学と考えると、都心まで通うより、埼玉方面の電車のほうが混まないのが、満員電車で毎日揺られる必要もないですね。

越阪部 確かにそうですね。東京に比べて、圧倒的に緑が多いので、理科の観察をしようと思ったら、近隣に大宮公園があるのでそこに行ってよく観察しています。グラウンドも朝早くいけば、カブトムシが採集できます。大宮駅はどこから来ても交通の便もよいです。太宰治が『人間失格』を脱稿したのも大宮と言われています。中学、高校生活を送るには、大宮は自然に囲まれ、文化的にも最高の環境だと思います。

立石 御校の社会の入試問題も特徴的ですね。自分の意見を書かせる問題が出題されているかと思いますが、受験者数が多い中で、採点するのは大変ではないですか。

越阪部 大変です。ただ、小学生の受験生が受験までに多くの時間、労力を費やしているので、我々教員がその頑張りに応えるためにも、問題づくりに知恵を絞り情熱を傾けます。生徒の進路を決める受験に、教員が真摯に向き合うことは当然です。そこは頑張らせてほしいと感じています。意見を問う記述問題に関しては、2点の目的があります。1点目は、算数が代表的ですが、昔から思考力を問わない問題はありませんでした。しかし、社会は知識を問う問題が自然と多くなるのです。その中で、これからの社会を背負って立つ受験生が自分の意見を書かなければいけないと考えています。2点目は、どこの受験用教材でも自分の意見を書かない教材はありません。しっ

かりと意見を書かせています。問題文でも誘導していますが、しっかりと書いていただいて得点源にしてほしいという意図もあります。入学してくる生徒たちのポテンシャルも高くなってきて、ようやく問題の内容に追いついてくれる受験生が増えてきているのも事実です。

志望校へ進学させたい。可能性を広げたい。大学入試のための教員全員参加の検討会を実施

立石 なるほど、そうした背景がメディアにも取り上げられるほど大学合格実績に表れてきているのですね。進路指導にもこだわりがありそうですね。

越阪部 進路指導部を中心に大学入試問題の研究と出願方法の研究をしています。年に2回全教員が出願に関して検討会、引継ぎ会を実施しています。1回目は、入試を終えた学年の教員が新高校3年生を受け持つ教員に出願について引継ぎをします。そこに高校1年生、2年生を受け持っている教員も参加します。2回目は、全生徒、500人の現時点の出願予定を全職員が目を通して検討会を実施いたします。生徒のメンタルも含めて出願方法を検討するのです。先ほども申しましたが、昼間は、生徒を「うちの子ども」と考えているので、保護者同様、真剣に考え抜いています。

立石 大学の選抜方法も多様化する中で、そこから生徒に合う出願方法を考えるのは教員の方々は、非常に大変ですね。

越阪部 そうですね。ただ言えるのは、私ども教員全員は生徒に敬意をもって接しています。その生徒たちの将来を輝かすためにも、志望校に対して責任をもって送り出したいです。その中で、大学受験の知識がない教員がいたら、責任をもって送り出せないのではないのでしょうか。そのためにも全員が積極的に検討会に参加しなければいけません。

立石 進路指導に関して、並々ならぬ思い入れがありますね。

越阪部 例えば、受験生が、大学附属系の中学校と大宮開成に合格して、自宅がちょうど真ん中にあると仮定した場合、おそらく現状は、ほぼ大学附属系の学校に進学します。しかし、大学附属系の学校だと、学部学科が限られてきます。その時に、自分が進学したい大学、学部、学科を自由に選択できるのは進学校の特権だと考えています。6年間で生徒たちの可能性が広がるような教育をして、生徒の志望校に進学させるという考えが、このこだわりにつながっていると思います。

立石 2004 年、アテネオリンピックで当時、勤務していた山本博先生が銀メダルを獲得した時に、御校のアーチェリー部が脚光を浴びましたが、今もアーチェリー部の活動は活発ですか。

越阪部 現在も活発ですね。もともと、アーチェリー部を設置している学校は、広大な敷地が必要なので多くはないのです。当校から、国体に何人も出場しています。中学はほとんど大会がありませんが、その間、しっかりと練習をして高校で活躍するパターンです。山本先生の弟子たちが指導にあたっています。山本先生の意志が脈々と受け継がれています。その他にも、チアリーダー部も盛んに活動しています。

立石 先生は、顧問をもっていますか。

越阪部 私はクイズ研究会の顧問を受け持っています。クイズ研究会は、公の大会がないため、活躍できる場所は限られていますが、それこそ、テレビ放映されている「高校生クイズ」等にも参加しています。生徒たちは大会で活躍するとか賞状が欲しいとかではなくて、自分磨きをするという点に尽きますね。卒業後も、自分磨きをしていくと思います。

生徒が先生の影響を受け過ぎないように「目立たない先生」としてサポートしたい

立石 先生個人のお話をお聞かせください。教員になろうとしたきっかけは何だったのですか。

越阪部 小学生の時の担任の先生に憧れていました。先生になりたいというより、その先生そのものになりたいと思っていました。具体的に教員を志望したのは、中学 3 年生の時です。当時、国語の物語文で、主人公の気持ちを答えなさいという設問に対して、間違える場面が多く、この原因を考えた時に、自分の気持ちで答えていたのだとわかったのです。

これは「本文から根拠を見つけて答えないといけない」ということがわかり、このことをしっかり生徒に伝えたいと考え教員を志望しました。当時、若かったので、当たり前と言えば当たり前のことでしたね。その後、大学に入学して太宰治の研究をしていました。卒業後、大宮開成に奉職をして、23 年目になります。

立石 19 年前の中高一貫部の立ち上げの時も先生はいらっしゃったんですね。

越阪部 立ち上げの時は本校に奉職していました。中高一貫部の 1 期生から担任を受け持っていました。立ち上げから、現在まで中高一貫部一筋です。

立石 中高一貫部の生徒たちの軌跡を見守っている先生ですが、将来、生徒たちはどのような未来を歩んでいってほしいですか。

越阪部 本校の「教育目標」には実学志向がありまして「世の中の人に役立ちなさい」という思いがあります。探究の調

べものにしても、最終的に社会貢献につなげるよう伝えていきます。探究の仕方は個人に任せます。ただ、最終的には社会に還元するように促しています。理由としては、生徒たちは社会に還元する力をたくさん持っているからです。生徒たちのアプローチ方法は様々で面白いです。例えば、SDGs を切り口にしたマイクロプラスチックで海が汚染される課題について調べ際に、実際に海に拾いに行く生徒もいれば、プラスチックの分解を考えて発表する生徒もいます。その他の課題でも、市長に会いに行行ってヒアリングしたり、自分で企業に連絡して訪問したりする生徒もいます。中には廃材を活用し、社会貢献できるネットショップを模擬起業する生徒もおります。実学を通して社会貢献をしていくような方向性を持っていきます。

立石 生徒一人では調べられない所は他の生徒と一緒に協働して進めていくのですか。

越阪部 これからの社会では、ますます「協働の精神」が必要になっていきます。協働の場では、個々の得意・不得意が如実に表れてきます。そこに男女がいると、さらにバラエティに富んだチームが作れます。ヒアリング能力、プレゼンテーション能力、発想力、実務能力等の高い生徒と一緒にってチームを作れば多様性のあるチームが作れます。共感性が高まり、価値観が共有されるので、生徒たちが社会に出たら活躍すると考えています。

立石 卒業した生徒たちと交流は続いているのですか。

越阪部 卒業生の会合によく呼ばれていますね。一言で言うと、いい意味でよく苦勞しているなと感じています。間違った教えはしていなかったなと同時に思っています。自分が成長できる場所を見つけて、そこで働いているのですが、どうしても責任のある仕事に就いたときに労働条件が必ず良いものとは限りません。しかし、生徒たちは自分たちが社会に貢献する視線で自分が成長できる職業を選択しています。外務省に勤めている卒業生が、現在、中東に赴任していますが、活躍を期待するものの、少し心配しています。

立石 自分が成長できる機会があったら、勤務時間、勤務日数を考えることなく働いてしまいますよね。そこで、信頼やスキルを得てさらに活躍できますね。私も 20 代から 30 代前半の経験は今でも活かされています。無我夢中だと、休みを忘れることもあります。充実していて楽しかったですが、い

ざ自分が塾のリーダー層になってスタッフに自分のような仕事の仕方は勧めないですね。ここは、時代の流れですね。もしかして、「働き方改革」は、きちんと理解をしていないと、人材の成長を妨げてしまうこともあるかもしれませんね。最後の質問になります。先生はどんな先生になりたいですか。

越阪部 目立たない先生になりたいです。「あの先生のおかげで」というフレーズがありますが、私個人は邪魔だなと思っています。できる限り生徒たちが心から社会貢献をしてほしいです。誰々先生の教え、誰々先生の影響となるとその生徒の良さが消えてしまう可能性があります。もちろん、学校の評判が上がるとかはありますが、それは非常に小さい話になってしまいます。目立たないように裏から生徒のポテンシャルを引き出し、最大限能力を発揮できるようにサポートしていきたいです。

【取材後記】

埼玉県私立中学校の受験生が増加しているのは、大宮開成中学校の影響は多大にあると考えています。これは、一過性のものではなく、大宮開成が積み重ねてきた取り組みが保護者、受験生に共感された結果だと思えます。大宮開成が中学を設置した時、たくさんの障壁があったことでしょう。そこを、越阪部先生をはじめとする先生たちが一つ一つ課題を解決して現在に至っていると思います。進学した生徒は敷地も広いこの学校で 6 年間、愛のある教育を受けていくと想像できます。合格者の 10% 程度の進学率ではありますが、学校の中身を知れば知るほど魅力のある学校だと思います。魅力伝われば、進学率は上がっていくでしょう。敷地が広大で、自然が豊かな環境にある立地だからこそできる教育を是非、体感してください。

立石 哲也 プロフィール

1975 年生まれ。市川学園、中央大学卒業。教育関係の会社に就職。2012 年、36 歳で個太郎塾北赤羽教室を開業。2021 年 5 月より浅草教室の運営も手掛ける。教室経営の傍ら、「子どもたちに幅広い選択肢を！」という想いから、首都圏模試で個別指導 EPPリーダーとして活動をしている。

